

# 近体詩平仄式の機械的説明法

櫻 田 芳 樹

はじめに

昨年金沢の日中友好協会の読書会の合宿に参加して、大家健治氏の製作した漢詩カルタの競技に参加した。そこで後日そのカルタに採用されている詩の平仄を○●で表示し、押韻、平仄の組み立ての原則など概略を説明したところ、会員の内容理解の意欲に今までにない手ごたえを感じた。そこで近体詩の詩律についてしっかり理解し、後には自分で参考書を手元に置かずとも再構成できるような機械的説明を徹底しようと試みた。以下はその試みの記録であり、近体詩平仄式教授法の一例として参考に供したい。

## (1) 五言絶句の平仄式

五言絶句の平仄式の説明には王力『漢語詩律学』（'79上海教育出版社 p 74）が示し、松尾善弘氏が踏襲してきた四つの基本平仄型が有効である。松尾氏は一句の型を見るには、起こりのみならず、その収束も問題にすべきことを言っている。（『日中漢字・漢語・漢詩・漢文論』斯文堂2011、p 74）。

王力は平仄二字ずつの組み合わせ「●●○○」「○○●●」を示し、この型に平仄2種の韻脚を対応させて残り1字を3字目5字目のいずれに平仄どちらで置くか決めていく。三字目の平仄は下三連を避けて選ばれる。これは実質二つの「起こり」に二つの「収束」から基本4型を導く松尾式のもとになったものである。松尾式では「起こり」と「収束」から下記（ ）内の1、2、5字が決り、更に3字目、4字目を決定する。その決定には一句内のバランス3：2による（A、C）と、1句内の「二四不同」から4字目を決め、下三連を犯さないように3字目を決める（B、D）となり、同じ基本平仄型が導かれる。

### 1 四つの基本平仄句型

仄起「●●○○」仄収→5字目●「●●○○●」A（●●3：2●）○○  
仄起「●●○○」平収→3字目●「●●●○○◎」B（●●24○○◎）3字目●  
平起「○○●●」平収→5字目○「○○●●◎」C（○○3：2◎）●●

平起「○○●●」仄収→3字目○「○○○●●」D (○○24●●) 3字目○  
 2 四つの基本平仄式

ここでこのABCDの基本平仄型を組み合わせて平仄式を作るのだが、そのためには句間に働く規則、反法と粘法がある。反法とは1・2句間、3・4句間の2字目4字目の平仄が反対になってつっぱりあうこと。粘法とは2・3句間の2字目4字目の平仄が同じになって粘着する関係である。又もう一つ五言絶句の押韻は原則平声韻で、2・4の偶数句末に踏むことも組み合わせに関わる。

基本平仄型を眺めると、ACとBDが二四のみならず全ての対応する平仄が反対になっており、「一三五不論」の許容則を使わない反法の理想形であり、この二組が粘法でくっつき合う平仄式を作る。松尾氏は初句「仄起一仄収」、「平起一仄収」を正格とするから、まず「仄起一仄収」Aを初句に置く。二字目は押韻字で平収となりB、Cいずれかだが、1句と反法になるのはCである。そのCに仄収、粘法で対応するのはD、第四句はDに平収、反法で対応するBとなる。これでi ACDBの平仄式が導かれる。もう一つ「平起一仄収」Dを初句とする式も同様の操作でii DBACが導かれる。

正格平仄式

2 - i ACDB型 登鸛鵲樓 王之渙

(『唐詩三百首詳析』五絶8/27例「大家カルタ」7/15例)

「●●○○●」A 白日依山盡 ●●○○● A haku,jitu,1,1,4  
 「○○●●◎」C 黄河入海流 ○○●●◎ C 2,2,nifu,3,2 平声尤韻  
 「○○○●●」D 欲窮千里目 ●○○●● D ˘yoku,2,1,3,moku 一不論  
 「●●●○○◎」B 更上一層樓 ●●●○○◎ B 4,4,iti,2,2 平声尤韻

——以下断りのない作品例示は大家カルタの例

平仄式の後に記したローマ字表記が入声を表し、数字が現代漢語の声調を示す。それに従ってその前に置いた平仄(○●)を導くことができる。D˘ 1字目のみ許容則を利用。

2 - ii DBAC型 罷相作 李適之 (『三百首』5/27例、「大家」1/15例)

「○○○●●」D 避賢初罷相 ●○○●● D ˘heki,2,1,4,4 一不論  
 「●●●○○◎」B 樂聖且銜杯 ●●●○○◎ B raku,4,3,2,1 平声灰韻  
 「●●○○●」A 爲問門前客 ●●○○● A 4,4,2,2,kyaku  
 「○○●●◎」C 今朝幾箇來 ○○●●◎ C 1,1,3,4,2 平声灰韻

D˘ 1字目のみ許容則を利用し、●：○が11：9の小さな瑕疵がある。

平声押韻からすれば2句、4句は平収のBCいずれか、3句は仄収ADのいずれかであるから2・3・4句の組み合わせはi型CDB、ii型BACの組み合わせしかない。すると、i式の2句C、ii式の2句Bに対応する二四の反法は仄収のA、Dの位置を換えても成り立たないが、平収ならそれぞれB、Cが見つかる。こうして次に示す松尾氏提示の二つの偏格平仄式が得られる。諭守眞『唐詩三百首詳析』（香港中華書局1959）は王力の五律表示の前半にならい、正格二式にそれぞれ「如首句用韻應作仄仄仄平平」（B）、「如首句用韻應作平平仄仄平」（C）の注をつけて同じことを示す。B、Cいずれも平収であるから、平声で韻を踏む絶句では、偶数句末押韻に、初句押韻が+αになる。同じ基本平仄型を2回使い、押韻+αになるこれが偏格となる。初句の仄収は「不押韻」、「平収」は「押韻」を意味するから、押韻規則遵守か押韻規則+αかを正格・偏格の識別標識とできる。

### 偏格平仄式

2 - iii BCDB (A → B) 春怨 金昌緒（『三百首』2/27例、「大家」2/15例）  
 「●●●○○」B 打起黃鶯兒B 〃 ●●○○○ 3,3,2,1,2 三拗で下三平を犯す  
 「○○●●○」C 莫教枝上啼C 〃 ●○○●○ baku,1,4,2（一拗を三で救拯、  
 「○○○●●」D 啼時驚妾夢D ○○○●● 2,2,1,4,4 孤平を避けた。）  
 「●●●○○」B 不得到遼西B ●●●○○ 4,toku,4,2,1 兒、啼も平声斉韻

「一三五不論」について王力は1甲種拗：七言第一字、C型以外の五言第一字、又同式（C型に●●を乗せた型以外）の七言の第三字「可以不避、也可以不救」2乙種拗：五言第三字、七言第五字「儘可能避免、否則儘可能補救」3丙種拗：C型五言第一字、同式七言の第三字「絶対避免、否則必須補救」（上掲書p90）と実相を提示している。

2 - iv CBAC型 (D → C) 勸酒 于武陵（『三百首』1/27例、「大家」1/15例）  
 「○○●●○」C 勸君金屈卮C 〃 ●○○●○ 4,1,1,kutu,1（一拗を三で救拯、  
 「●●●○○」B 滿酌不須辭B ●●●○○ 3,shaku,4,1,2 孤平を避けた。）  
 「●●○○○」A 花發多風雨A 〃 ○●○○○ 1,hatu,1,1,3 一不論  
 「○○●●○」C 人生足別離C ○○●●○ 2,1,soku,betu,2 卮、辭も平声支韻

### 3 例外としての仄声韻

平声韻が原則の五言絶句では仄声韻は例外である。しかし例外と言っても『唐詩三百首』では仄声韻が9首あり、平声韻の偏格の実数などに照らしても平仄式を示して置くべきであろう。そこで偶数句末に仄声韻がくること1、3句は平声韻となることを頭におけば、i C平起平収を出発して、反法、粘法、

反法と選択して i CABD (○●○●)、ii 仄起平収 B から同様に ii BDCA (○●○●) が導かれる。平仄式を表示した漢和辞典の付録などはこの平仄式を掲げている。(『新選漢和辞典』小学館昭和57年版、『漢語林』大修館昭和62年初版)

ところが喩守眞『唐詩三百首詳析』ではそれぞれの初句を仄声韻の D、A に換えて i ˊ DABD (●●○●) ii ˊ ADCA (●●○●) を表示している。これはもし仄声はみな韻を踏むなら、正格と押韻 + α の偏格の関係を意味するが、喩氏は初句 D、A の仄声韻に「不押韻」の注記をして押韻 + α とはせず、初句を正格に換えるような注も施していない。そこで『唐詩三百首』にある9首の平仄式を見てみると、機械的に導いた正格 i CABD、ii BDCA は一例も見えず、喩氏の i DABD (●●○●) 3例(斐迪「送崔九」、劉長卿「送上人」「送靈澈」) ii ADCA (●●○●) 1例(王維「竹里館」となっており、後の五首はみな反法や粘法の成立しない破格である。『唐詩三百首』になかった正格 i CABD には(皮日休「寒夜酒醒」)、ii BDCA には(皇甫曾「山下泉」)が松尾氏の『唐詩の解釈と鑑賞&平仄式と対句法』(近代文藝社 p 175 '93年)に挙例されているが、いかにも見つけにくそうな例である。

#### 4 『唐詩三百首』の五言絶句、七言絶句登載が近体詩の基準か

従来『唐詩三百首』の五言絶句、七言絶句なりに登載されていれば、近体詩としての五言絶句、七言絶句と思っていたが、ここまで来て、必ずしもその登載が近体詩の基準クリアを意味するかどうか、検討の必要を感じはじめた。

例えば仄声韻の破格ぶりを示せば(王維「雜詩」BD不粘BD、王維「鹿柴」C反法×D不粘B反法×A、孟浩然「春曉」、柳宗元「江雪」DA不粘CA、賈島「尋隱者不遇」AD不粘BD)である。また平声韻の破格を示しておけば、韋應物「秋夜寄邱員外」DB不粘D反法×C、王建「新嫁娘詞」A反法×B不粘DBとなっている。これも近体詩としては極端な破格である。

そう思って見直すと、すでに王力は「仄韻律詩和絶句可以説是近體詩和古體詩的交界處」(前掲書 p 51) と言い、松尾氏は「『三百首』が五言絶句の部に37首(27首?)の作品を採択した時の規準は、恐らく最低それらが押韻していること、(従って平声押韻でも仄声押韻でもよい)と、一句が五文字の四句形式で出来上がっていることぐらいではなかったのだろうか。」(李白「静夜思」考『唐詩鑑賞法』 p 48 白帝社 '02) という疑問を提出しておられた。

(2) 七言絶句の平仄式

七言絶句の基本平仄型は、まず先に得られた四つの五言句の基本平仄型に平仄いずれかの二字を載せればよいこと、王力上掲書 p 75に「只在句首加上兩個字、仄頭加成一平頭、平頭加成一仄頭」と言う通りである。五言の頭と反対の平仄をのせるのは字数を7字にし、平仄比を4:3にするためである。

1 七言基本平仄型

仄起→仄收 「●●○○●」 A → ○○「●●○○●」 A 平起→仄收  
 仄起→平收 「●●●○○◎」 B → ○○「●●●○○◎」 B 平起→平收  
 平起→平收 「○○●●◎」 C → ●●「○○●●◎」 C 仄起→平收  
 平起→仄收 「○○○●●」 D → ●●「○○○●●」 D 仄起→仄收

五言絶句では偶数句末押韻が原則であったが、七言絶句（七言律詩も）には一句目末と偶数句末に押韻する。すると、五言絶句の時には偏格であったものが一句目末押韻で押韻+αであったから、七言絶句ではこの正格、偏格を入れ替えて i BCDB (◎◎●◎)、ii CBAC (◎◎●◎)、iii ACDB (●◎●◎)、iv DBAC (●◎●◎) とする。

2 七言絶句正格の平仄式

2-i 正格平仄式 i BCDB (『三百首』21/51例、「大家」10/18例)

早發白帝城 李白

朝辭白帝彩雲間 ○○●●●○○◎B 1,2,haku,4,3,2,1 平声刪韻  
 千里江陵一日還 ○●○○●●◎C 1,3,1,2,iti,niti,2 一不論 平声刪韻  
 兩岸猿聲啼不盡 ●●○○○●●D 3,4,2,1,2,4,4  
 輕舟已過萬重山 ○○●●●○○◎B 1,1,3,4,4,2,1 平声刪韻

2-ii 正格平仄式 ii CBAC (『三百首』22/51例「大家」7/18例)

夜雨寄北 李商隱

君問歸期未有期 ○●○○●●◎C 1,4,1,1,4,3,1 一不論 平声支韻  
 巴山夜雨漲秋池 ○○●●●○○◎B 1,1,4,3,3,1,2 平声支韻  
 何當共剪西窗燭 ○○●●○○●A 2,1,4,3,1,1,shoku  
 卻話巴山夜雨時 ●●○○●●◎C kyaku,4,1,1,4,3,2 平声支韻

2-iii 偏格平仄式 iii ACDB (『三百首』3/51例、「大家」0例)

江南逢李龜年 杜甫

岐王宅裏尋常見 ○○●●○○●A 2,2,taku,3,2,2,4  
 崔九堂前幾度聞 ○●○○●●◎C 1,3,2,2,iku,4,2 一不論 平声文韻  
 正是江南好風景 ●●○○●●●D 4,4,1,2,3,1,3五六拗、王力(特拗)

落花時節又逢君 ●○○●●○○◎B<sup>˘</sup> raku,1,2,setu,4,2,1 一拗を三で救拯、

押韻二句目とも平声文韻、D<sup>˘</sup>は五六字の平仄が反転しているが、王力前掲書(p100)はこれを応試の排律にも見られる程よくある「子類特殊形式」とし、これを「拗」と呼ぶなら「特拗」ということを提案している。——『唐詩三百首』引

2 - iv 偏格平仄式 iv DBAC (『三百首』2/51例、「大家」1/18例)

九月九日憶山東兄弟 王維

獨在異鄉爲異客 ●●●○○●● D<sup>˘</sup> doku,4,4,1,2,4,kyaku 三不諭

每逢佳節倍思親 ●○○●●○○◎ B<sup>˘</sup> 3,2,1,setu,4,1,1 一拗を三で救拯

遙知兄弟登高處 ○○○●○○● A 2,1,1,4,1,1,4 三不諭

遍插茱萸少一人 ●○○○●●◎ C<sup>˘</sup> 4,1,1,2,3,iti,2 二拗、親、人平声真韻

### 3 喻氏表示の七言絶句の平仄式

#### 3 - i 平声韻平仄式

喻守真が示す七言絶句の平仄式は「1仄起平韻正格」(ii CBAC)「2平起平韻偏格」(i B C D B)として、( )に対応を示した松尾式正格平仄式に相当するものが掲載されている。これには五言絶句でした「1仄起平韻正格」「2平起平韻偏格」に注記をして偏格iii、ivを導くような措置はとられていない。しかし原理は同じだから初句の位置に仄収のAかDかを置き、次のB、Cに反法になるように選ばいいから、「1仄起平韻正格」には「如首句不用韻應作仄仄平平仄仄」(D)と、「2平起平韻偏格」には「如首句不用韻應作平平仄仄平平仄」(A)と注記し、それぞれC、BをD、Aに入れ替えれば、松尾氏の設定した偏格iv DBAC、iii ACDBが得られる。

同書の七言絶句の総数は51首で各平仄式の分布は( )書きで示した。偏格iii型、iv型も僅かだが確実に実作が対応するから、機械的に得られた平仄式も机上の空論ではなく、偏格iii、ivの押韻-αを表示する意味がある。

#### 3 - ii 仄声韻平仄式

また「至於壓仄韻的七絶卻少有人做」と言いながら五言絶句と同じく例外的仄声韻の平仄式も「3仄起仄韻正格」「4平起仄韻正格」として掲載している。先に示した辞書の付録にも同じ平仄式が挙げてある。ところが51首の七言絶句には一首も見当たらないのである。「少有人做」の実作を確認することは大変だが、機械的求め方だけ記せば、まず「3仄起仄韻正格」は1・2・4句仄声押韻だから、1句目仄起仄収となってD、2句目は仄収でDの反法になるA、3句目は押韻なしの平収でAの粘法になるB、4句目は仄収でBの反法のDで

「3 DABD (●●○●)」となる。「4 平起仄韻正格」は平起仄収型のAから始めて同じように「4 ADCA (●●○●)」となる。

### (3) 五言律詩の平仄式

絶句は四句に対して、律詩は八句となる。絶句4句が「起句、承句、転句、結句」とよばれるに対し、律詩は2句ごとに「首聯・頷聯・頸聯・尾聯」と呼び、頷聯・頸聯に対句を置く。

高木正一氏は『文学概論』(中国文化叢書4、大修館書店p94)に五言律詩の(甲)仄起式を  $i ACDB + i ACDB$  と表示し、(乙)平起式は  $ii DBAC + ii DBAC$  と表示している。それぞれ五言絶句正格平仄式の繰り返しである。一方喻守真『唐詩三百首詳析』では「仄起定式」は  $iii BCDB + i ACDB$  とされ「第一句如不壓韻爲『仄仄平平仄』」と注記がある。これを使えばBはAとなり、高木平仄式と同じになる。高木氏は偶数句末押韻が原則だから、一句目は仄収Aを使ったのに対し、喻守真氏は押韻+αの平収Bを使ったのである。高木氏は正格二式を表示し、喻守真氏は「平起定式」 $iv CBAC + ii DBAC$  にも同じ操作を施し、五言絶句の時とは逆に偏格二式を表示して、注記の形で正格二式を示しているのである。四平仄式は示しているが、理路が逆転していると思う。

### (4) 七言律詩の平仄式

高木式(甲)仄起式は  $ii CBAC (○○●○○) + iv DBAC (●○○●○)$ 、(乙)平起式では  $i BCDB (○○●○○) + iii ACDB (●○○●○)$  となっている。喻守真の「仄起定式」「平起定式」もこれと同じだが、やはりそれぞれに「第一句如不壓韻爲『仄仄平平仄仄仄』(D●)」「第一句如不壓韻爲『平平仄仄平平仄』(A●)」と注記しているから、高木氏は正格二つを表示し、喻守真氏は正格二式に注記して偏格をも表示しているのである。五言律詩の時は五言絶句の同一平仄式の繰り返しだったが、七言律詩の正格は初句、偶数句末押韻のため1句目平収、5句目仄収となり、(甲)  $ii$ 型+ $iv$ 型(乙)  $i$ 型+ $iii$ 型(正格2型に対応する偏格を付加)となっている。

### (5) 律詩における仄声韻

五言律詩、七言律詩では、通常ともに仄声韻の式が示されないのは対応する実作がごく少数(『唐詩三百首』五律0/80、七律0/50)のためである。

## (6) 排律の平仄式

更に排律は以下のように律詩の後半部を重ねていけばよい。この式は第一部分が絶句、第二部分までで律詩、第三部分を加えて排律という相互の関係がよく見えると思う。

五言排律 正格「仄起仄終」{ i ACDB (●◎●◎) + i ACDB } + i ACDB  
「平起仄終」{ ii DBAC (●◎●◎) + ii DBAC } + ii DBAC  
偏格「仄起平終」{ iii BCDB (◎◎●◎) + i A (●) CDB } + i  
ACDB

「平起仄終」{ iv CBAC (◎◎●◎) + ii D (●) BAC } + ii  
DBAC

七言排律 正格「仄起平終」{ ii CBAC (◎◎●◎) + iv D (●) BAC } + iv  
DBAC  
「平起平終」{ i BCDB (◎◎●◎) + iii A (●) CDB } + iii  
ACDB

偏格「仄起仄終」{ iv DBAC (●◎●◎) + iv DBAC } + iv DBAC  
「平起仄終」{ iii ACDB (●◎●◎) + iii ACDB } + iii ACDB

以上で起こりには平起仄起の2種があり、その収束に2種あって、一句の4基本平仄型を設定し、その組み合わせで得られる平仄式の導き方を示した。その機械的導き方は五言絶句で示した操作法が七言絶句にも通じる。五言律詩では正格二つの繰り返し、七言律詩では初句押韻のため、i型には初句を換えた偏格iii型が、ii型にはその変換型iv型が組み合わせられたことを見た。これで近体詩六体の平仄式をいずれも機械的に説明できたと思う。

(元北陸大学教授)